



Title	往生伝としての『とはずがたり』試論：夢を媒介として
Author(s)	阿部, 真弓
Citation	詞林. 1990, 7, p. 29-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

往生伝としての『とはすがたり』試論

— 夢を媒介として —

阿部 直己

一、はじめに

夢は、その神秘性によって多くの者を魅了し、文学作品にもしばしばその姿を見せてきた。単なるエピソードとしての役割のみならず、重要な局面において推進力となる夢は、文学の主眼なプロットの一つであった。『とはすがたり』にも「夢」という語は頻出し、具体的に内容が記されている夢も十二と、作者の関心の程を伺い知ることができる。

『とはすがたり』が巧みに先行文学を撰取していることについては、すでに多くの論考があるが、夢の描写にも、先行文学の影響を多分に見出すことができる。しかし、それは単なる模倣ではなく、事件の予告や二条のその時々的心情を如実に物語るように、精妙にアレンジされており、多彩でかつ劇的な効果をもたらしている。そして、その叙法は二条の『とはすがたり』執筆意識と根底でつながっているように思われる。

拙稿では、それを示す特徴的な夢を二例採り上げ、先行文学

が二条の中でいかに昇華し、表現されているか、そしてその結果が二条の人生の再構成にどのような作用を及ぼしているかについて、考察を試みたい。

二、後深草院の二条懐妊の予知夢

二条の妊娠の予知夢を、二条自身は二度、後深草院と「雪の曙」と「有明の月」はそれぞれ一度ずつ、見たことになっていく。これらの夢は、すべて、物体（もしくは本人）が二条の懐妊（二条自身、または車）に入るという型を持っている。夢がその人の持つ潜在意識や思考パターンの産物であることを考えると、特定の人物が類似した複数の夢を見ることは十分あり得るが、しかし異なった人物がそれぞれ近似した夢を見る可能性は、ほとんどないと言ってよい。二条自身の夢はともかくとしても、他の男性の夢は虚構と考えるのが、妥当なところであろう。

それらの夢の中で、巻三における弘安四年二月十八日の後深

草院の夢は、他の懷妊予知夢と同パターンを有してはいるが、やや特殊な性格を持っており、そこには虚構の必要性を説明する糸口があると思われる。第二節では、特にこの夢を採り上げて検討していきたい。

「有明の月」との情事の後の二条に対して発せられた院の言葉から、夢の部分に次に引用する。

さても今宵不思議なる夢をこそ見つれ。今の五銚を賜ひつるを、われにちと引き隠して懐に入れつるを、袖をひかへて、『これほど心知りであるに、などかくは』と言はれて、わびしげに思ひて涙のこぼれつるを払ひて、取り出でたりつるを見れば、銀にてありける。故法皇の御物なれば、『わがにせん』と言ひて、立ちながら取ると思ひて、夢さめぬ。今宵必ずしるしある事あるらんとおぼゆるぞ。もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ。

二条の懷妊の予知夢が、擬古物語から影響を受けているということは、すでに辻本裕成氏が指摘しておられるが(一)、その論文でとりあげられた以外にも、『夢の通ひ路』に同パターンを有する夢がある。

おとこ君は、なま心やましくて、かゝるうた、寝などを、かの御けしきの思ふ様にて、かたみにかたらひましかば、おかしうもあわれにもあらめとおぼすには、げに、まつはしなげき給し御さまかたち、弥つと御心にたへず、ゆかしう、いかに詠らめとおぼし出らるゝに、心ちもなやましく

て、打やすみ給へるに、かの御もとにて、まだすだせぬすゞめをもろともにかひ給へるを、姫君の御ぞに引いれ奉り給へりしを、上よりめすとて、鳥を人の引かくひてかへさずと見て、夢さめぬ。(巻五)

一条権大納言が、後に入内することになる京極の三の君と一夜を明かした後に見た夢であるが、夢の内容及び、三の君の産んだ三の御子は帝の子として養育されるというこの後の展開を予知した点において、『とはすがたり』と、酷似している。(二)懷妊予知夢の内容のパターンは、確かに擬古物語の夢のそれを受け継いでいると考えてよいだろう。

ただ、後深草院の言葉の最後を、「もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ」とするのにより、後深草院ないし二条には、生まれてくる子を薫に、また院と「有明の月」と二条の關係を、『源氏物語』若菜下の光源氏・柏木・女三宮の關係に擬する意図があることがわかる。夢の前後の展開が『源氏物語』から大きく影響を受けているということはすでに指摘されており、『とはすがたり』の夢想を含む展開そのものは、女三宮の懷妊が夢で予知されたというプロットを取り込んだとも考えられる。

しかし、夢そのものには相違点が多く、例えば夢を見たのは源氏ではなく、女三宮の相手の柏木であり、またその内容も、ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫のいとらうたげにうちなきて来たるを、この宮に奉らむとて

わが率て来たると思しきを、何しに奉りつらむ、と思ふほどに、おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ。

というもので、二条懐妊の夢との影響関係は、にわかには認め難い。

『とはすがたり』には、先行文学の夢内容と展開をほとんどそのまま踏襲している例も見出せる。巻二の建治三年四月末に「雪の曙」が見た夢がそれである。御所を出奔した二条を探す「雪の曙」は、

跡なき事を嘆きて、春日に二七日籠られたりけるが、十一日と申しける夜、二の御殿の御前に昔に変わらぬ姿にて侍ると見て、

という夢想を得たことがきっかけになり、二条との再会を果たすのであるが、この一連の出来事は、次の言葉でしめくくられている。

「さても残る山の端もなく尋ねかねて、三笠の神のしるべにやと参りて、見しうば玉の夢の面影」など語らるるぞ、住吉少将が心地し侍る。

二条は、「雪の曙」を擬古物語の『住吉物語』の男主人公に仕立てていることを明確に記しており、検討中の懐妊予知夢とその点では似通っている。しかし、この場面では『住吉物語』の夢内容も展開も、ほとんど形を変えず撰取している。

以上のように、先行文学をそのまま踏襲している例もある一方で、この懐妊予知夢においては、ことさら「疑ふ所なき右根

の松をこそ」と『源氏物語』を意識させておきながら、なぜ夢内容そのものはあえて擬古物語の型を二条は選んだのであろうか。言い換えるなら、『源氏物語』の夢が、二条にとってどの点が不足であったのであろうか。

また、実は擬古物語の型ですら二条にとって満足なものではなかった。擬古物語、また『源氏物語』においては、夢想は妊娠する本人かその相手が得ることになっており、確かに他の二条懐妊の予知夢でも、見たのは二条と姦通の相手であった。ところが、この夢に限っては、二条の夫ともいへば後深草院が見たことになっている。この夢の最大の特徴であるその点についても説明する必要がある。

第一の問題点から考察を試みたいが、それにはまず、『源氏物語』の夢と『とはすがたり』の夢の違いを検討すべきだろう。夢の内容の相違は、それを見る時点での当事者二人の関係の微妙な違いを反映していると思われる。

柏木が夢を見たのは、源氏が二人の関係に気づく以前であった。たとえ源氏が二人の心に暗い影を落としていたにしろ、この場の主人公はあくまでも柏木と女三の宮であり、懐妊もこの時点では、単に二者間での問題となる。よって、夢の内容に第三者が入り込む余地はなく、ただ柏木と女三の宮のみで成り立っている。

しかし、『とはすがたり』は違う。源氏と異なり、後深草院は、二条と「有明の月」の関係を知っているばかりではなく、

二人をとりもつという異常な行動にまで及んでいる。すでに二人の間の院の存在を無視できない状況にまで追い込まれており、二条の懐妊が現実の事となれば、それはもはや「有明の月」との関係の枠内だけに収まる話ではない。加えて、懐妊が三者の緊張した不自然なバランスの中の事件である以上、生まれてくる子供が「運命の子」という重荷を背負わされることは、懐妊以前からすでに決定していたことになる。このような状況を象徴する夢を設定するならば、柏木の夢は、二条にとつては、まことにもつて物足りない役不足なものという他ない。三者の微妙な状況を表現すると同時に、生まれてくる子の運命をも示唆する夢が、この場合必要となってくるからである。

そこで、二条はこの状況を表現するためにより適した夢を、他の物語に見出し、取り入れた。子供の運命を中心にした内容を持ち、なおかつ三者の関係を明確に示せる擬古物語の夢のパターンを採用したのだ。しかし、二条はただそれを無造作に撰取したわけではない。擬古物語においては、夢の登場人物は事件に関係する三人だが、『とはずがたり』では、院が二人の関係を認知していることをまだ知らない「有明の月」は、夢の中には登場させない。が、故後嵯峨院の御物である五鉾杵によって、後嵯峨院の血をひく密教僧である「有明の月」を「登場」させるという手の込んだ技巧を使い、秘密めいた関係をより一層浮き彫りにしているのである。

では、この夢が擬古物語の型を踏襲したのであれば、なぜ夢

を見た人物が型通りに二条か「有明の月」ではなく、二条懐妊に直接関係を持たない後深草院であったのか。そして、あえて「源氏物語」を喚起させる言葉を添えて、この場面を『源氏物語』の世界に再び引き戻す必要があったのか。

それは、二条と「有明の月」の関係を知った後の後深草院の役割と決して無関係ではないと思われる。後深草院は、二人の関係を知った後、「男女のことは前世からの約束であり、私に気兼ねをせずともよい」と、二人の仲を取り持つ等の寛大な態度をとり、実際に懐妊の兆候があると、院自らが「有明の月」にその旨を告げる役を負う。二条にはあてこすりを言うこともあるが、終始二人を見守り、その秘密の関係がうわさになると、人の目を欺くために、生まれた子を引き取り、院が他の寵姫に生ませたことに仕立てるのである。院の行為は、二人にとつて、一見大変理解のあるありがたいものであった。

しかし、その実はどうであったか。事は一貫して、後深草院のペースが進められ、当事者二人は、自分たちの意志を挟む余地も与えられない。二人の関係が院に知られてからは、場面の主人公はすでに後深草院に移っていたのだ。院が仲介した夜の後の妊娠ということは、本来運命的な懐妊ですら、院の管理下にあったということであり、また、実の面親にあるべき、生まれてきた子の養育先の決定権まで、院に剝脱されていたも同然という有様であった。運命に翻弄されているかに見える二人は、実は後深草院に支配され弄ばれていたということになる。

あたかも、『源氏物語』の柏木と女三の宮の様に。

二人の關係が源氏に知られるまでは、物語は柏木と女三の宮の世界であつた。しかし、発覚の瞬間から、一転してその主人公は源氏へと移り、彼の「拳手一投足が、二人の運命を変えていき、その生死さえも司ることになる。」

「疑ふ所なき岩根の松をこそ」という言葉は、生まれてくる子は『源氏物語』の薫のように後深草院に引き取られるということを示しているだけではない。所詮二条と「有明の月」は、女三の宮と柏木のように、源氏の役を担つた院に翻弄される存在にすぎないことを、暗示しているのである。

二条は、終始、後深草院の庇護に対して感謝の念を持って描いてはいるが、子供が連れ去られたところで、ふと筆が緩み、「御計らひの前は、いかがはせん」とつぶやいている。二条は、自分たちが意志を持つことも出来ない、院の単なる持ち駒の一つであること、院に人生の主人公を取って代られてしまったことを、痛切に感じ取っていた。そして、院の慈愛に満ちた態度が、実は真綿で首を締めるような彼の復讐であることにも気づいていた。

懐妊の夢は主人公が見ることになっていることを先に示したが、以上のことから、後深草院が夢を見るという構成にした二条の意図が理解できる。この場の主導権を握っているのは、後深草院であることの強調なのである。「有明の月」と二条は、脇役においやられ、自分らの子の懐妊の夢ですら見ることがで

きなかつたことを、訴えているのだつた。

生まれた子供を引き取つた後、言わばゲームの終わった後深草院は、急速に二条に対する興味を失つていく。つまり、これは話の主人公が、再び二条と「有明の月」に戻つたことをも意味する。二条はその後彼の第二子を懐妊するが、その予知夢は、彼ら二人が見ることになっている。同じ「有明の月」を相手とする懐妊でありながら、予知する夢想を得る主体が違うという構成を採つたのは、それぞれの場面の主人公の相違を明確にするが故であつた。

後深草院が夢を見るという構成にしてまで、各々の立場を強調する理由は何か。即断することは難しいが、清水好子氏の言われるように(〜)、巻三が子供に残したものであるなら、子を捨てる以外にどうしようもなかった自分を正当化するという姿勢が、このような構成を採つたと考えられる。が、同時に、先行の物語の力を借りて、自分の人生を客観視しようという二条の試みがみられるように感じるのである。

人生においては、いかなる時にも、自分は必ず主人公である。しかし、客観的に眺めた時、はたして実際に、自分がその折々の中心人物であるかどうかについては疑問が残る。もし物語ならば、主人公となる人物に次々とスポットライトが移っていくはずであるが、主観的世界ではそれを明確に認識することは困難である。しかし、二条は、自分の人生の中でスポットライト

をはずされた瞬間を見極めた。本来、全編作者自身が主人公である日記の中で、その役を他人に譲ったのだ。日記において他人を中心にして描くことは決して容易なことではない。が、二条は、先行文学を利用して、場面の主人公をその枠にはめる事で表現を可能にしたのである。それが実際に成功したかは一概には言えないが、自分の人生をより客観的に描こうとする二条のこうした意欲は評価すべきであると考ええる。

二条の視点を客観へと導いた原動力は何であらう。それを解明していくには、やはり夢の検討が必要となる。次節では、二条の見た熊野での夢を採り上げる。

三、熊野での夢

熊野那智大社での夢は、『とはすがたり』最後部に描かれており、最も長く、複雑な内容を持つ。従来、これは、石清水八幡宮での遊義門院との邂逅を予知した夢と解釈されてきた。懐妊の予知夢は作品中で解釈されているが、熊野での夢も同様に、遊義門院との邂逅の際、二条自身が、「去年見し夢の御面影さへ思ひ出で参らせて」「見し夢も思ひ合せられ」と夢解きをしている。この夢が予知夢であるという解釈は、適切であろう。しかし、この夢がそのような二元的な解釈で処理できるとは思われない。予知夢という一面を持つにしろ、この熊野での夢はあまりにも多くの問題を内包しているからである。あえてい

えば、ただの予知夢であるのなら、これほど複雑な夢を、しかも『とはすがたり』の締め括りといってもいい重要な場面に設定する必要はない。やはり、そこに何かを訴えようとする二条の意図を理解し、夢を解釈していかねばなるまい。

この節においては、熊野での夢の持つ問題点について、二節と同様に先行文学からの影響から検討し、それに基づきこの夢の新しい解釈を試みたい。そして、『とはすがたり』の持つ一つの可能性についても言及したい。

熊野での夢の内容を、次に述べることにする。二条は、両親の形見を手放し、熊野那智大社において年来の宿願である写経に努めている。「(両親の)形見の残りを尽して、唱衣いししと宮む心ざしを、権現も納受し給ひにけるにや」と、よくはかどり、やがて山を降りる時が近づいてきた。その名残を惜んで、夜もすがら拜むその暁方に夢想を得る。

すでに故人である父親が、「出御の半ば」と告げる。同じく故人となつている後深草院は、「鳥擲を浮織物に織りたる柿の御衣を召して、右の方へちと傾かせおはしましたるさまにて」「証誠殿の御社に入り給ひて、御簾を少し上げさせおはしまして、うち笑みて、よに御快げなる御さま」である。続いて、遊義門院の登場を告げる。遊義門院は、「白き御袴に御小袖はかりにて、西の御前と申す社の中に、御簾、それも半に上げて、白き衣一つ」を取り出し、二条に向かって、「二人の親の形見をうらうへへやりし心ざし、忍びがたく思し召す。取り合せて

賜ふぞ」と言い、その衣を受け取らせる。二条は、再び元の座に着き、「十善の床を踏みましましなから、いかなる御宿縁にて、御片端は渡らせおはしますぞ」と父親に尋ねると、「あの御片端は、いませおはしましたる下に、御腫物あり。この腫物といふは、われらがやうなる無知の衆生を、多く後へ持たせ給ひて、これを憐みはぐくみ思し召す故なり。全くわが御誤りなし」との答が返ってきた。「なほ同じさまに快き御顔」である御深草院の「近く参れ」という様子に、二条は御殿の前にひざまづく、「白き箸のやうに、本は白々と削りて、末には柵の葉二つつある枝を、二つつ取り揃へて賜はる」のである。

二条が目覚めると、折しも「如意輪堂の懺法」が始まるうとしており、傍らを探ると、白い檜の骨の扇がある。那智の「備後律師かくだう」という者は、「扇は千手の御体といふやうなり。必ず利生あるべし」と二条に告げるのであった。

以上が夢の粗筋である。複雑な内容であるが、整理し、注意すべき点を列挙すると、

①御深草院が、快げな表情を絶やさず、証誠殿にいる。そして院が右に傾いていることについて、無知なる衆生を憐れみ育んでいるという理由付けがされている。また、遊義門院は西の御前にいる。

②二条は、遊義門院から白い衣、御深草院から柵の葉のついた枝を頂いている。(覚醒後白い扇が傍にあり、那智の律師はそれについて「必ず利生があるはずだ」と解釈している。)

③父親は、この夢においての状況解説者である。ということになる。

①は、熊野三山の組織を考慮しながら、考察すべきである。

熊野大社は、証誠殿に家津御子神、西宮(西御前)に結神、中宮(中御前)に速玉神を祀っている。平安時代、神仏習合の風潮が現われ始めると、熊野もその例外ではなく、周知の如く、家津御子神に阿弥陀如来、結神に千手観音、速玉神に薬師如来が本地仏として定着していった。

二条は、後深草院と遊義門院のいるそれぞれの社殿を明記しており、それは登場人物の眞の役割と密接に関係していることを示していると考えられる。前述した熊野の組織を念頭に置くと、この夢の中で、後深草院が証誠殿、また遊義門院が西の御前にいるということは、それぞれが阿弥陀如来、観音と何らかの関連性を持っている、一歩進めて考えると、阿弥陀如来が後深草院、観音が遊義門院の姿を借りて示現したという可能性が生まれてくる。

後深草院が阿弥陀如来の変化として描写されているとする根拠は、笑みを湛えた快げな表情であったことが二度にわたって強調されていること、そして片端であることの二点である。

『とはずがたり』には、「泣く」以外に人物の表情について語られた箇所はほとんどないが、ここに限って如来の穏やかな表情を連想させる文辞を二度も使っているところに、執筆している二条の意図を見て取ることができる。また、片端である理由

を「無知の衆生を、多く後へ持たせ給ひて、これを憐みはぐくみ思し召す」とするが、それは、巻五において三井寺の不動の説話がひかれた後、二条自身が語る「苦の衆生に代らんために、御名を八幡大菩薩と号すとこそ、申し伝へたれ」（八幡大菩薩は、阿弥陀如来を本地仏とする。）という言葉と符号するのである。

後深草院の現れた場所、表情、そして片端の姿となっている理由の以上三点より、夢の中の後深草院は阿弥陀如来を意味すると導くことができる。

同様に、西の御前にいる遊義門院は観音の変化と解釈することができよう。

説話等では、観音は僧や老翁として示現することも多い。しかし、西の御前に祀られた結神は、『神道集』に本地が千手観音で五衰殿の善法女御と書かれてあり、現在熊野大社に残されている結神像や熊野曼陀羅(4)も女神として作られている。

『長秋記』にも「女神」と記されており、このことは一般的にも知られていたであろう。女性である遊義門院が観音の変化であることは、十分考え得る。

この裏付けも、『とはすがたり』の中に見出すことができる。夢の記事に入る直前の「形見の残りを尽して、唱衣いしいしと宮心ざしを、権現も納受し給ひにけるにや」という二条の言葉と対応するように、彼女は、夢の中で、遊義門院から親の形見を手放した褒美として、白い衣を戴いている。先に引用した

二条の言葉は、夢想という次の展開への意識の現れと考えられ、夢の意図するところの一つの証になると思われる。(5)

以上のように理解すると、この夢は「阿弥陀如来と観音が、二条に衣と榊の枝を下賜した」という内容となり、霊験夢にはしばしばみられるパターンとなる。夢の中で神仏に何かを下賜され、それをもとにして好運をつかむという筋書きは、物語や説話等にしばしば見られ、一見複雑にみえるこの夢は、熊野大社でのありふれた霊験夢と解釈できることになる。

では、この霊験夢は、いかなる利生が二条にもたらされることを示しているのか。それは、②③の表現上の問題点を考察していくことで明らかにできると思われる。

下賜された衣と榊の枝の意味を説明するため、②を検討していきたい。まず、衣は観音である遊義門院からの賜物であり、現世利益を与えるという観音の性格を考慮すると、従来解釈にみられるように、遊義門院との邂逅を利生とすると解くことができよう。

阿弥陀如来からの榊は熊野の神木で(6)、夢を象徴する事物としてはふさわしく、二条がそれを選んだことに無理はない。しかし、枝ということに着目すると、そこにはやはり先行文学からの影響を見出すことができる。

『更級日記』には、作者が長谷寺に参籠した際の「暁までむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より『すは、稲荷より賜はるるしの杉よ』とて、物を投げ出づるやうにするに、うち

おどろきたれば、夢なりけり。」という夢の例があるが、これから直接影響を受けたという可能性は少ないだろう。懐妊予知夢と同様に、熊野の夢想の叙述にも、実は擬古物語の影響がうかがえるのである。

例えば、『苔の衣』の靈験夢には、

こよひは御まへに給ふ。明月がたにぞすこしまどろみ給に、いひしらずだけかき女ばうの、かたはらにつ(い)ゐてたゞかくばかりぞ。

ふたばよりことなる花はえたりとも

ひらけん春はみもしはてしを

とてなん、ゑならぬはなのえだをたまはずとみて、御返事申さんとおぼすほどに「へんじやうだんじやうさうし女の」と、よむこへにうちおどろきたまひぬ。うつゝにもなをそひたる心ちしてなつかし。殿にかくときこえ給へば「しるしあるべきにや」と、かぎりなくうれしくおぼす。

(巻一)

とあり、また、『あまのかるも』の靈験夢には、

新中納言は、ありし夢の、ちは、山みちもいそがる、やとまちわたり給へば、いとゞこひしく、おなじ雲井の空もなつかしくおぼへ給へば、又はつせへまいる給て、このたびは三七日ばかりとぞおぼす。あすいで給はんとて、うつくしき御そうのうしろの、御う(さか)じをしあけて、「かなふまじきことをおぼしなげくがいとをしければ、のちの

よはたすけきこえん。そのほどのなぐさめに、これをだにたてまつる」とて、をしいで給物をみれば、うつくしき女の、こがねの枝に、しきといふ文を一くわんつけてもたまへるを、うけとり給てみれば、心つくしきこゆる人也けり。いとあさましうれしきに、大将おはして、「いみじき物のさまかな」との給へば、「それをかせ給へ」とて、さしたてまつり給と御覽じて、夢さめぬ。(巻三)

と記され、擬古物語の靈験夢において、枝を利生の約束とする筋書きは、一つの型であったと思われる。

擬古物語では、靈験夢で下賜された場合、多くは利生として子が授かるという展開が用意されているが、熊野での夢の解釈にそれを適用することはできないだろう。しかし、先に引用した『あまのかるも』のように、主人公の中納言の往生をも示唆するものとして、「こがねの枝」が下賜されている例も見出せる。それでは、こちらの解釈を熊野での夢想に適用することはできるであろうか。

それについて考察を進めるため、③の問題点をあわせて検討していくことにする。

この夢の中で、後深草院と遊義門院の登場を一条に知らせ、後深草院の片端の理由を説明する二条の父親は、状況解説者という重要な役割を担っている。②と同様にこの人物の存在も先行文学からの影響の可能性を秘めているように思われるが、このような人物を介した夢は、管見によれば、『とはすがたり』

に多大の影響を与えている平安時代の物語や擬古物語の中には見出すことはできない。

ところが、同じく影響を与えているといわれている説話に目を移すと、二条と阿弥陀如来(後深草院)、そして二条に状況解説をする側なる父親という三者の關係に似た形式は、往生説話の夢にしばしば見出すことができるのである。

いくつか例を挙げると、『拾遺往生伝』巻上第十一話阿闍梨維範の往生伝には、

又慶念上人同時夢。有一大城。衆僧集会此中。南院闍梨。修日想觀而居。此時音樂西聞。聖衆東來。先伽陵頻六人。鬪舞衣而下。次小田原教懐上人乘雲來。《件上人先年往生人也》慶念問其故。傍人答云。南院闍梨往生之儀也云々。とあり、また、同じく巻下第二十五話上野介高階敦遠家室の往生伝にも、

此夜。常陸介藤原実宗後房。字肥後内侍夢。遙見西天。雲帰上界。頻伽阿三出雲而舞。夢驚思之。以為妄想。即又入寢。此時弥陀如来。与諸聖衆。作微妙樂。從雲霞來。傍人告曰。此是五条太宮有往生女。其迎接云々儀也。夢驚夜曙。と描写されている。往生の(または往生を約束される)様子を夢で見、「傍人」によってその状況が説明されるというパターンが『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』等説話集には多く見られる。二条が見た熊野大社での夢の中の人物設定は、往生伝から影響を受けているとみてよいのではないか。

無論、二条がこれらの往生伝集を読み知ったという可能性は少ない。しかし、巻四の春日詣の際に語っているように説話を聞き知る機会が多くあったことは推察でき、前記の類の往生説話の形式を、二条は自分の中に吸収し、消化した形で熊野での夢に利用したことは、十分考え得ることである。

先程、②を検討した結果、椰の枝が二条の往生を約束するものである可能性が生まれてきたが、この③の結果は、それを裏付けるものとなった。

以上のように、①より、熊野の夢が単なる予知夢ではなく、靈験夢であり、その枠組みが③より往生説話の形式を持っていることが解明された。そして、②より椰の枝は二条の往生を約束するものである可能性が生まれてきた。これを総合すると、熊野での夢は、二条が阿弥陀如来から極楽往生を約束された靈験夢でもあったという解釈が成り立つのである。舞台を熊野という第一級の靈場に設定し、実に巧妙な細工を施して、重要なメッセージを我々に訴えていたのであった。

中世の僧にとっては、修行の成果として、どのような好相の夢を得るかが最大の関心事であり、二条もその例外ではなかったろう。熊野に詣でたのも、写経のためばかりではなく、夢想を得るといふもうひとつの目的を持っていたと考えられる。

(7)この夢が事実か虚構かについて知るよすがはないが、解釈する場合そのような次元からは離脱すべきだろう。すでに描写された時点において、夢想に対する作者自身の解釈とそれを記

した意図は明確に現れているからである。二条にとつては、これまでの修行に対しての評価をここに書き留めておく必要があったのだ。

この夢が、往生説話の夢の形式を採っていることを指摘したのだが、実は『とはすがたり』全体が「往生伝」であるともいえるのではないか。

卷一から卷三までの宮廷編では、二条自身の救われない人生を描いていると同時に、後嵯峨院の崩御を「さまざま、かつはこしらへかつは教化し申ししかども、三種の愛に心をとどめ、懺悔の言葉に道を惑はして、終に教化の言葉にひるがへし給ふ御気色なくて、」と、そして父の死を「きとおどろきて、目を見開くるに、あやまたず見合せたれば、『何とならんずらんは』と言ひも果てず、文永九年八月三日辰の初めに、年五十にてかくれ給ひぬ。」と、それぞれ極楽往生の様子とは解釈できない描写をしている。「有明の月」についても然りである。二条は、文字通り地獄に墮ちていく人々の姿を目の当たりにし、そして、自らも生地獄の中にいた。

一転して、巻四と巻五では、その地獄の世界を飛び出して、出家し、西行に倣った修行をする姿を描いている。その修行は、亡き両親と「有明の月」、後には後深草院の回向が主目的であったろうが、しかしその結果、心が仏に通じ、二条は、自分の往生を約束される夢を見たという構成になっている。

地獄に墮ちるであろう罪人が何かをきっかけに改心し、修行

に励んだ結果往生を得るといふのは、往生説話にしばしばみられる型なのである。

熊野での夢は、二条にとつて、言わば自らの「往生伝」を書き上げるための、欠くべからざる重要な要素であった。「更級日記」においても、作者は夢で往生を約束されているが、『とはすがたり』との相違は、作者自身の言葉でそれが解釈されているところにある。『とはすがたり』においては、二条は熊野での夢を淡々と語るのみで、秘められた意味については口をつぐんでいる。二節で指摘したのと同様に、ここには、往生という重大な事柄についても距離を保とうという態度、つまり客観的な目で人生をとらえようとする意志が見られるが、その意志を生み出した原動力は、「往生伝」創作への意欲であったと思われる。人生の再構成に際し、その意欲が二条の視点を主観から客観へと誘い、そして先行の物語から表現を借りることで、その具象化を可能にしたのである。

なお、この夢が覚めた後、二条は扇が傍にあることに気づく。律師は「扇は千手の御体といふやうなり。」と解いているが、二条自身が「かの夢の枕なりし扇を、今は御形見とも慰めて」と記していることを考えれば、これは柳の枝が変化したものと解釈してよいだろう。

ここでやや唐突に扇が登場したことについて、いささか愚見を述べると、それは『長谷寺靈驗記』『三國伝記』に所収され

ている「高光少将遁世往生事」との関係による可能性がある。

村上天皇の時代、九條右丞相師輔の第八息（母は雅子内親王）

高光少将は、応和元年十二月五日に立ち出て、比叡山横川の聖

のもとで出家した後、大和の多武峰で修行をしていた。法名を

如覚という。その後の部分を、『三國伝記』から引用する。

爰ニ、旧室也ケル人、少将ノ行方ヲ不_レ知_レ其跡ヲ尋ケル程

ニ、（中略）観音ノ御方便ヲ憑ツツ、泊瀬ノ寺ニ尋詣、少

将ノ有所_レ吾_レ知ラシメ給ヘト、致_シテ心ヲ祈精シ玉ニ、七日

ニ満ケル夜、一茎ノ蓮花ヲ授給_フト見テ夢醒ヌ。所願大聖

ニ通セルコトヲ喜テ返リケル程ニ、泊瀬川ト倉橋川トノ落

合ニ河合ト云処ニ、シガラミノ有ケルニ扇ノ流懸タルヲ見

トバ、少将ノ扇也。観音ノ御利生ニヤト思_ヒ成シ、（8）

女は如覚を探したが、彼の勧めに従って出家する。康保四年

八月十五日、如覚が往生を遂げたことを記した後、この説話は

次の言葉で締め括られている。

彼ノ観音ノ一茎蓮華ヲ賜ケルハ、夫妻共ニ十界無為ノ淨刹

ニ可_レ生表事ナルヲ哉。誠ニ貴キ利生哉。

『とはずがたり』との直接の影響関係について確言すること

は難しいが、注目していい説話である。ともに夜もすがら祈請

している夜の夢という状況の一致、「椰の葉二つづつある枝」

と「蓮華」という相違はあるがそれぞれ二つ賜わっていること、

そしてそれが「観音の利生」（ここでは極楽往生）の験と解釈

されている等の点は看過できず、二条の傍にあったとされる扇

も、この説話の「観音ノ御利生ニヤ」と解釈されている少将の

扇にひかれた可能性があると考えられる。

四、終わりに

『とはずがたり』の夢は、二条の人生を彩り、読者にその人

生がまるで物語であるかのような印象を与えるものを持っている

。それは、事実、表現を先行文学から学んでいるということ

に由来していたわけだが、二条はそれを自分の中で発酵させ、

独特で個性的なものに仕上げていった。

しかし、検討してきた二つの夢にうかがえるように、二条の

先行文学摂取は、単なる表現上の問題にとどまらず、自分の人

生との距離を作り、二条の視点を主観的なものから客観へと昇

華させる原動力ともなったのである。日記文学において客観性

と自照性は切り離せない問題だが、先行文学を巧みに利用する

ことで、精神レベルの向上を図ろうとする二条の試みは注目す

べきではないだろうか。

なお擬古物語からの影響については、まだ説明せねばならな

いことがあり、拙稿では問題が多く残されたままになってしま

ったが、それらは今後の課題とし、拙稿を終えたい。

注

- (1) 「同時代文学の中の「とほすがたり」」(『国語国文』、一九八九年一月)
- (2) 現存する『夢の通ひ路』は、『風葉集』所収の物とは別書と考えられ、南北朝頃の成立ではないかとされている。しかし、この物語は先行文学の香りを色濃く残す作品であり、夢の部分も鎌倉時代の多くの先行の擬古物語の姿を今に伝えている可能性は大きい。
- (3) 「古典としての源氏物語―とほすがたり執筆の意味―」(『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』古代文学論叢 第七輯 武蔵野書院)
- (4) 鎌倉時代のもっとされる兵庫湯泉神社所蔵の熊野曼陀羅図には、本地仏と神像の両方が描かれている。
- (5) この夢の後、二条は現実の遊義門院と石清水八幡宮で対面するが、その時自分の肩を踏ませて院を前庭に降ろすという行いに及ぶ。これは、熊野での夢で観音の役割を担っていた院への一種の捨身行ではなかったか。
- (6) 『中世文学論考』 第三章「とほすがたり」研究の問題点(福田秀一 明治書院)
- (7) 松本寧至氏が二条と時衆の関係を指摘されているが(『中世女流日記文学の研究』明治書院)、夢を得る場として二条が熊野を選んだのも一遍の夢想を意識していた可能性が

ある。

(8) 『長谷寺靈驗記』では、夢を見るのは如覚である。

なお引用は、

- 「とほすがたり」は「新潮日本古典集成」(新潮社)
「夢の通ひ路」は『夢の通ひ路物語』(福武書店)
「源氏物語」「更級日記」は「日本古典文学全集」(小学館)
「苔の衣」は「古典文庫」
「あまのかるも」は「鎌倉時代物語集成」(笠間書院)
「拾遺往生伝」は「日本思想天系」(岩波書店)
「三国伝記」は「中世の文学」(三弥井書店)
による。

(本学大学院博士前期課程)